

すべての人のためのリハビリとしてのデザイン —— 〈作業〉と〈承認〉から考える

松山聖央

概要

わたしたち人間と道具のあいだには、有用性にもとづく連関があると考えられてきた。しかし、美学や倫理学の近年の議論では、人間と事物一般のあいだにも〈承認〉関係が成立する可能性が示されている。本講演では、こうした議論を手がかりとして、医療や介護の現場で取り組まれる「作業療法」というリハビリ手法に着目する。〈作業〉（occupation）とは、たんなる単調な仕事ではなく、存在論的には、行為する身体が特定の場所や時間を占有（occupy）し、同時にその場所や時間によって身体が占有される状況でもある。疾病や怪我からの回復のためだけでなく、すべての人の日常において、作業の経験によってもたらされる生のデザインについて考えてみたい。

略歴



1983年京都府生まれ。北海道大学理学部卒業、同大学院文学研究科修士課程修了。北海道立近代美術館学芸員、武庫川女子大学生活美学研究所助手を経て、2024年より岡山県立大学デザイン学部建築学科准教授。現代ドイツの美学思想および環境美学・日常美学を専門とする。近年の論文に、「日常美学と承認論の交差—ユリコ・サイトウの「修理の美学」をめぐって」（『道具学論集』（28）、45-55、2023年）など。